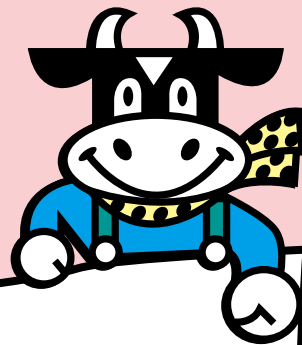


# ワンポイント・アドバイス



## 牛肺虫症について

「肺虫」という虫の名前は、一度は耳にしたことがあるという方が多いとは思いますが、普段はあまり意識されることのない虫ではないでしょうか。先日の診療で、久しぶりに肺虫症の症例に遭遇したので、おさらいしてみようと思えます。

### 〈感染経路〉

線虫の一種である牛肺虫は、気管支や気管に寄生して寄生虫性気管支肺炎の原因となります。牛の他、シカやラクダにも感染することが知られています。

牛肺虫に汚染されている放牧地で、牧草に付着した子虫が口から入ることで感染します。口から入った子虫は腸管へ行き、その後リンパの流れや血流のついで、肺へとたどり着きます。肺に移動した子虫は成虫になり、卵を産みま

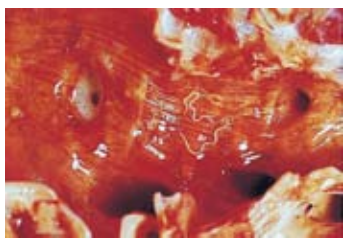


図1

糞便中に排出されて新たな感染源となります。

### 〈症状〉

他の肺炎同様に、発熱、食欲不振、呼吸速迫、発咳、鼻汁などですが、特徴的なのは咳です。肺虫が気管や気管支に寄生しているため、首を伸ばして異物を吐き出すような咳を繰り返します(図2)。



図2

これらの症状は、牛の状態や感染の濃度によって異なります。一般に、成牛よりも育成牛で重症化し死亡する場合があります。

### 〈診断・治療〉

特徴的な咳、細菌性の肺炎をターゲットにした治療で症状が改善しない、駆虫を実施していないなどのことから、肺虫症を疑います。検査は糞便を採取し、子虫を顕微鏡で確認します(図3)。ただし、感染した肺虫が卵を産み、それが孵

化して糞便中に出るまでのタイムラグがあるので、症状が出ていても子虫が検出されない場合もあります。

治療は駆虫剤の投与を行います。注射薬もありますが、使いやすさから背中にかけるタイプのものが選択されることが多いです。搾乳牛には使用できない薬もあるので注意が必要です。



図3

### 〈予防〉

予防は放牧地に肺虫子虫を侵入させないことです。このためには育成牛や乾乳牛、導入牛への駆虫を行うしかありません。汚染された牧野への放牧を中止しても、子虫は越冬するという報告があるので、完全な清浄化は望めないのです。

放牧から帰ってきた牛が激しい咳をしていることに気づいたら、診療所の獣医師に相談してみてください。そして、最近駆虫をしていないなあという方は、是非この機会に駆虫をお勧めします。